

社会福祉法人 正仁会 なごみの郷 (理学療法士)

山本 夏祈 さん

やまもと・なつき

●11年3月広島国際大保健医療学部理学療法学科卒。障害者支援施設ときわ台ホームを経て、13年1月から社会福祉法人正仁会なごみの郷に理学療法士として勤務。石川県出身。25歳。



「心」通い合う理学療法士目指して 利用者と喜び共有できる関係を

自身が体感した「体を動かす楽しさ」を障がいのある人たちにも伝えたい。そんな思いで理学療法士を志したという山本夏祈さん。1年次生の実習先で出会った先輩理学療法士のプロ意識に向上心を刺激され、決意も新たに勉学に集中。新卒で障害者支援施設に就職し、結婚退職後の2013年1月から特別養護老人ホームで第二のキャリアをスタートさせました。

「白衣を着た体育会系ともいわれる、理学療法士の格好いいイメージにひかれました」と話す山本さんは、体を動かすことが大好きなスポーツウーマンです。自分の興味を仕事とリンクさせて、体を動かす楽しさを伝えたいと考え、広島国際大に入学しました。初めて理学療法士の現場に接したのは1年次生の夏の見学実習。患者の肩をもみながら、何気ない会話をしているように見えた理学療法士が、しっかり患者の体の評価を行っていることに、第一線にいる医療人のすごさを実感したそうです。座学では実感できなかった知識の重要性を知り、もっと学びたいとモチベーションがアップ。希望者対象の実習にも積極的に参加し、見聞を広めていったと言います。

思い出深い活動の1つが、水泳を用いた療法の先進国イギリスで学んだ「ハロウィック法」の研修です。これは基礎ゼミの担当教官に紹介されて興味を持ったのですが、浮力が働く水中運動は、高い運動効果を持ちながらも負担が少なく、障がいのある人たちの

リハビリに適しています。入学後に取得したライフセーバーの資格を生かせることもあり、大学の短期海外研修支援制度を利用して、3年次生の夏に受講しました。「集中力に欠ける子どももプールに行くと落ち着くんです。普段は見られない笑顔が見られることがうれしくて、帰国後も障害者リハビリセンターのプールでボランティア活動をしていました」

たとえ言葉の壁があっても、体が触れ合うことで心が通い、お互いに居心地のいい時間を過ごすことができる。このことは山本さんの原点となっています。最初に就職した「ときわ台ホーム」は、常時介護を必要とする障がい者が入所している施設。コミュニケーション能力に課題を抱える人も少なくなく、「関係性を築くために、まずは自分を知ってもらうことから始めました」。1年次生の実習で見た光景のように雑談しながら必要なケアを行い、「今日はどんなことがありましたか？」など質問を交えて相手のことを知っていたと言います。ゆっくり話すことを心掛け、笑顔がこわばっていないか、いつも鏡でチェック。相手の表情がだんだん柔らかなものへと変わっていく様子を見るのが何よりのやりがいでした。

結婚を機に退職し、今年1月から特別養護老人ホーム「なごみの郷」で活動再開。入所者とデイサービスの方のリハビリ支援に取り組んでいます。「なごみの郷は言葉でダイレクトに反応が返る点が面白い。でも、やっぱり基本は触れ合いです。まだ利用者の方に遠慮されていると感じることもありますが、『長年どこの病院に行っても取れなかった痛みが、ここで先生と出会えたお陰で取れた』と言われた時はうれしかったです。ちょっとしたことでも相談に乗れるような関係を築きたいですね」

後輩たちに望むのは、「出会いの分だけ経験豊富になるので、同年代の友人に限らずいろいろな人と出会ってほしい」ということ。「先生とも仲良くなって何でも相談し、たくさんのことを教えてください。先生と学生の距離が近いのは広島国際大の大きな魅力ですし、理学療法士の先輩として実際の仕事を聞くことができます」。どんな勉強もやっていることに無駄はないと言い切る山本さんの心は、高い志と情熱に満ちています。

